

# 哀悼歌

嗚呼

# 大隈侯



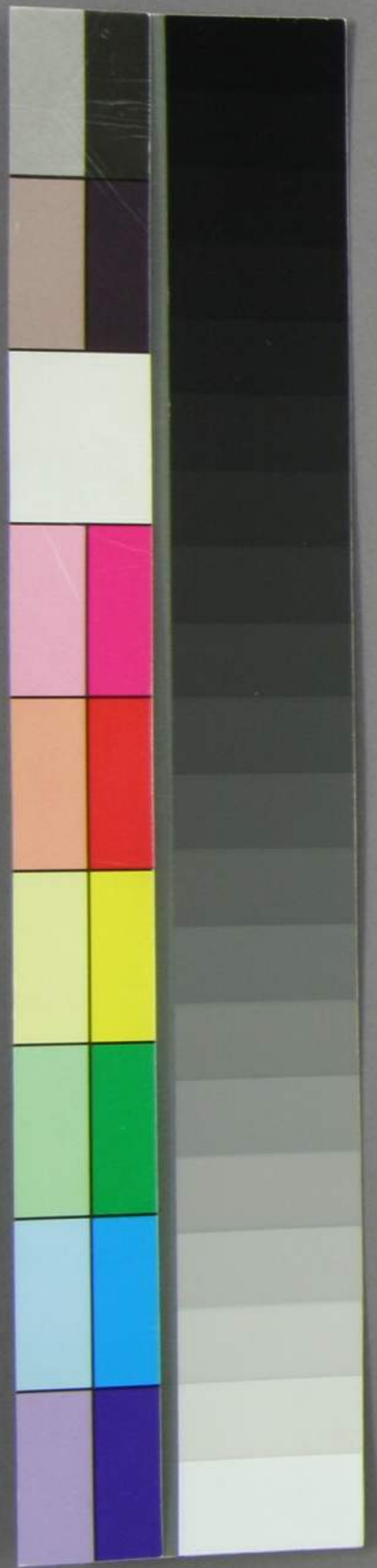
ハ調 $\frac{2}{4}$	音	譜	
2 3 4 2	6 7 4 2	6 7 2 6	6
3 3 4 6	6 2 7 3	6 4 3 2	2
7 2 2 3	2 7 7 2	6-7 2 3 3	3
6 7 2 3	2 7 6 6	4 3 4 2	2

自序

在世八十有五歲朝士野  
 嶽度常示其治所見也  
 六十年來其志未嘗一日  
 二創設以天邦有爲之  
 大企圖以發其開土之  
 養成人材而進其國之  
 人於世界之舞臺也  
 夫其所以成此大業者  
 全賴其精神之奮發也  
 夫其所以成此大業者  
 全賴其精神之奮發也  
 夫其所以成此大業者  
 全賴其精神之奮發也

於浪華假寓  
 大正壬戌陸月中浣  
 澁家声月識

行發 會鳴共年青歌演



大隈侯爵

早稻田學府の父として 其教へ子は云ふもさら 教へを受けぬ者迄も 徳を慕はぬ者もなし 我が日本の國民も 外國々の人々も 秋津島根に此人の あるを知らざる人もなき 世に類なき博學者 我が日本の偉人なる 侯爵大隈閣下こそ 筑紫肥前の佐賀藩主 鍋島侯の家臣なる 信保殿の長子にて 天保九年の生れなり 和漢の學を藩費の 弘道館に學び終へ 致遠館にて洋學の 蘭と英とを兼ね終む 鬼となりても主守れてふ 葉隠集の教訓に 刻み込まれし尊王の 心もへだつ時もとき 徳川幕府の不徳なる 其政事に墜ちて 島津毛利に志士出で 大政返還喧傳す 夙に大義を明かに 勤王唱へし重信侯 豫て待ちにし時來ぬと 副島江藤を相謀り 王政復古を唱導し 天下の志士と往來し 我が日本の國のため

王事のために盡瘁し 君に盡せし甲斐あり 其真心の現れて 封建制度打破せられ 明治維新となりけり 國に盡せし丈夫の 茲に登龍の門啓け 明治初年の其時に 始めて徴士彌つきに 參與外國會計官 大蔵大輔大藏卿 參議の職を歴任し 財政外交の衝となる 明治十四の其年に 在野に下ると諸共に 改進黨を組織して 立憲政治を唱導す 黒田内閣成立に 再び入りし其椅子の 外國務大臣の 條約改正の其がために 御國に盡す赤心も 民の輿論に逆行し 來島恒喜に狙撃され 遂に失ふ雙脚を 次で樞密顧問官 松隈内閣に 總理或は内外務 顯官高職踐歷し 明治三十一年に 再びまたも野に下り 憲政本黨總べ理む 其可にぞ推されけり 憲政擁護或は又 邦土文化の開發に

我が國民の教育に 深く心を留意して 小野梓と語ひて 早稻田大學創建し 自ら是れが長となり 天下の士をば教導す 大正三年櫻もちる 卯月に散りし山本の あと引き繼ぎし首相なる 印綬二年有餘日 あやに畏き天皇の 高御座にぞ即き給ふ 御即位式の恙なく 終ゆるに及び野に下る 早稻田の邸にあるとても 内外人の引見し 常に門戸を開放し 閑雲野鶴を友とせず 政治經濟教育に 得意に辨舌爽かに 談論風發舌長く 壯者を凌ぐ意氣を持ち 閑を離れて有爲なる 新人材を登用し 常に殖産興業に 邦家のために奔走す 維新元勳の其多く 東洋的の英傑を 眞似て盛んに女色して 浩然の氣を養へり 然るが中に侯爵は 能く大勢を卓見し 國藝讀書に興味をもち 己が清氣を充溢す

身體保健を鼓吹して  
主張をなせる人壽も  
成年期間の五倍なる  
壹百二十有五歳  
己が攝生能く守り  
節酒禁煙苟しくも  
不攝生なる行蹟は  
常に慎しみありしかど  
多年國事の心勞に  
併せて出でし其宿痼  
醫師の施療の甲斐もなく

藥石の効見へずして  
維時大正十一年  
一月十日の朝まだき  
八十五歳を最後とし  
遂にかへらぬ人となる  
嗚呼現世を浮世とは  
實にや宜なり此言葉  
生者必滅會者定離  
諸行無常の習ひとて  
かゝる得難き偉丈夫も  
望む天壽容れられず

理想の四十歳を殘し置き  
己に黄泉に旅立たる  
さはさりながら侯爵の  
たてし功績は長へに  
其御教は千代かけて  
我が日の本を彌かため  
東都早稻田の巍然たる  
其學園の名と共に  
其名は代々に傳らむ  
譽れは長久に輝かむ

完

大正十一年二月十五日印刷

大正十一年二月十八日發行 (内務省納本濟)

編輯兼寺敷憲三  
印刷發行者

大阪市北區上福島北三丁目五〇  
大阪市西區南堀江上通一丁目  
印刷所 佐野印刷所  
大阪市北區上福島北三丁目五〇  
發行所 大阪青年共鳴會